

海外の大学における語学教育を参考に、今後の日本の大学における語学教育を検討する：
オーストラリアの大学の日本語クラスを事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 好比古 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009476

海外の大学における語学教育を参考に、今後の日本の大学における 語学教育を検討する

-オーストラリアの大学の日本語クラスを事例として-

山本 好比古（静岡大学 大学教育センター）

1. はじめに

現在、日本の大学教育において、アクティブ・ラーニングやプロジェクトベース型の授業重要性が注目されている。文部科学省（2012）の大学教育部会の審議のまとめにおいても以下のような事が記されている。

... グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等による課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）に取り組む、成果を上げる大学も出てきている。これらは、国際的通用性が問われる知識基盤社会、グローバル社会における高等教育において、日本型の学士課程教育モデルとしてさらにその発展、展開を図ることが期待される。

しかしながら、こうしたアクティブ・ラーニングやプロジェクトベース型の授業を展開するには、少人数のクラスを作る必要があり、例えば、100人以上の大規模クラスでアクティブ・ラーニングやプロジェクトベース型授業を展開するのは現実的ではない。しかしながら、現実としては、日本の大学に置いて科目によっては100人以上の大規模クラスを展開せざるを得ない状況もあるので、一クラス20～30人以下の小規模クラスを簡単に作る事は容易ではない事も多い。そこで、オセアニア圏の大学の授業形態に目を向けてみると、オーストラリア・ニュージーランドの両国のほとんどの大学で、講義クラスとチュートリアルクラスの二つの異なる授業形式をセットにして、各科目を学生に提供している事に気がつく。詳細は事項の先行研究で説明するが、講義クラスでは

日本の大学でも伝統的に行われているように、担当教員が授業内容を説明し、学生はその講義を聞いて知識を得る事に目的を置いている。チュートリアルクラスでは、講義クラスをいくつかのチュートリアルクラスに分けて、講義の内容を担当教員やクラスメイトと議論したり、グループワークでいろいろと作業したりするのである。このチュートリアルクラスは、前述記した、日本の文部科学省が推進するアクティブ・ラーニングまたはプロジェクトベース型授業に近いと考えられる。本稿では、実際にオーストラリアの公立大学の一つを著者が訪問し、現地の大学教員の協力を得て、現地の学生を対象として講義とチュートリアルに関するアンケート調査を行い、その結果をまとめ報告すると同時に今後日本の大学教育、特に語学教育に応用・発展できるかを考察する。

2. 先行研究

ここで講義とチュートリアル違いを明確にしておく必要がある。この違いを明確にするにあたり、Bulter (1992)の講義について説明が参考になる。高等教育に置ける伝統的な講義スタイルは、講師による一方的なコミュニケーションが50分続き、講師は教科書や講義ノートを説明し、学生は講師の説明を聞きながらノートを取る。つまり、伝統的な講義スタイルの授業では、学生は受講科目の知識をより深める事が出来るのであるが、講師による説明だけで授業が終了してしまう可能性が高く、学生が質問したいと思っても質問する機会が少ない。そしてチュートリアルであるが、Maheshwari (1997)によれば、チュートリアルの目的は、学生が講義で学んだ内容について理解を深めたり、実

際にそれを実践したり、学生が講義で理解できなかった箇所または疑問を解決する場として、学生に提供する事を目的としている。つまり、チュートリアルでは講義でカバーしきれなかった箇所の補足をしたり、学生が抱える問題を解決できるようにサポートすることができる。このように、講義とチュートリアルを組み合わせることで、講義では学生が学ぶべきポイントを説明し、チュートリアルでは講義クラスをいくつかに分ける事により、少人数教育によって学生が講義で学んだポイントを復習したり、学生同士でディスカッションしたり、より詳しく学ぶ仕組みが存在するのである。Prather et al. (2005) の研究によれば、講義とチュートリアルの組み合わせによる授業を理系分野を専攻していない学生のための天文学入門をアメリカの大学で試験的に行ったところ、講義の後の15分ほどの短いチュートリアルではあるが、チュートリアルクラスにおいて学生の講義内容に対する理解度が上昇したばかりでなく、学生達の間でチュートリアルの評判が良かったと報告をしている。また、英語のライティング指導に関して、田林 et al. (2009)も、一クラス35人のクラス編成から一クラス18人のチュートリアル形式のクラス編成を導入したことにより、各クラスにおける学生の学習活動の活性化につながったと報告している。

3. 調査方法

調査は、オーストラリアにある公立大学の一つで実際に教鞭をとっている4名の講師の協力を得て、そこに在籍する学生にアンケート調査を依頼した。アンケート調査は、2012年8月20日から9月10日の間に著者が現地に赴き実地した。調査対象者は、日本語学科において、日本語を専攻または副専攻とする学生であり、合計90名の学生からの解答を得ることができた。これらの学生の中には留学生も含まれるが、これらの留学生は、語学留学の留学生ではなく、大学の正規の授業を現地のオーストラリア人学生とともに受けている留学生である。質問した内容は以下の通りである。

1. Are you an undergraduate student or postgraduate student?
2. Do you think lectures help your study?
3. Please write a reason(s) for your answer above (Question 2)
4. Do you think tutorials help your study?
5. Please write a reason(s) for your answer above (Question 4)
6. Is there any problem of attending tutorials?

日本語学習者対象のアンケート調査であるが、調査対象者の多くが第一言語が英語であるため、アンケート調査は英語で行った。

4. 調査結果

まず、質問1「あなたは学部生ですか？それとも大学院生ですか？」の質問により、調査対象学生は学部生だけという事が確認できた。オーストラリアの大学では、学部で開講されている科目に、大学院生が何かしらの理由で、時々学部生対象の講義を聴講している事があるため、この質問を聞く必要があった。質問の2と4の結果は Yes または No の解答だけなので、以下に簡単にまとめる。

	Yes	No
Q2	82 (91%)	8 (9%)
Q4	90 (100%)	0

結果が示す通り、4番目の質問である「チュートリアルは勉強のサポートになっているか？」という質問の解答は、調査対象者の90人すべてが「はい」と応えている。2番目の質問の「講義は役立つか？」の質問も約9割の学生が「はい」と応えている。

質問3と質問5については、多様の解答が得られたので、質問ごとにまとめる。まず質問3では質問2での理由を聞く質問であるが、「はい」と答えた学生と「いいえ」と答えた学生がいたので、これら二つの解答別に回答例を下にまとめる。多種多様な回答が得られたのであるが、似たような意味の解答は著者の判断により一つの解答にまとめ

た。

Q3でYesと答えた人の回答	回答数
It helps understanding topics of the subject	21
Lectures give us general information (summary or overview) which is good to introduce us	21
Lectures provides the theory and it is then applied in tutorials	9
Good to have additional information to support readings or concepts	6
It helps to understand terminology and definitions of the textbook	4
Visual and interaction with teachers	3
It reinforces materials which you need to read	3
It helps tutorials	3
I can more focus and less distracted by others in the lecturer	2
It helps for preparing exams & assignments	1
Since the size of the class is small, each of us gets more individual attention	1
Lecturers explain things which are not on the textbooks	1

Q3でNoと答えた人の回答	回答数
Not engaging enough	3
It does not help if lectures simply read the textbook since I can do it in my own time	1
Lecturer materials are repeatedly explained in tutorials	1
Better to just look at slides of PPT	1
Boring	1
I always sleep in the lectures	1

Q4の解答で、「はい」と答えた学生のなかで上位を占めている理由は、「受講している科目の理解が深まる」と「講義では授業の概要や一般的な知識を得られる」が42解答あった。この二つの解答に続く解答が、「講義ではチュートリアルに応用できる理論を学べる」、「教科書の内容をサポートする知識が得られる」、「専門用語や定義を理解するのに役立つ」、「講師とのやり取りや講師が使うビジュアルマテリアルが役立つ」、「講義に出席する事で、強制的に教科書を読むようになる」、「チ

ュートリアル役に立つ」、「他の学生から邪魔される事なく、授業を聞ける」などの解答が続いた。また、Q4で「いいえ」と答えた学生の理由で挙げられているのが、1の回答に見られる「(講義クラスでは、学生同士または教員との) コミュニケーションをかわす機会が少ない」事を挙げている

Q5に関しては回答者全員「はい」と解答したので下にまとめる。これもQ3と同じく多様な解答があったが、似たような解答は著者の判断により、一つの解答にまとめた(類似解答含む)。

Q5の回答	回答数
More contacts/discussions with tutors & students	42
Better understanding & Solve problems of what I don't understand	20
Small classes make us one to one discussions with the other student	11
Get practical work	9
More detailed information will be given in tutorials that lectures don't cover	8
We can exchange/share information with other students	6
Get help for assignments & exams	5
Meet new people	2
Gives me motivation to keep up with the subjects	1

上位の解答は、「チューターや他の学生達とより多くのインタラクションやディスカッションがある」、「少人数のクラスは、1対1の他のクラスメイトとのディスカッションを可能にする」、「実践的な(授業に関する)アクティビティー」などがあり、これらの解答に続いて、「講義ではカバーできない細かい内容」、「他の学生との情報交換がしやすい」、「提出物や期末試験のよりきめ細やかなサポート」、「普段交流のない学生と交流ができる」、「モチベーションが高まる」といった解答が続いた。質問6に関してはとくに解答がなかったので省略する。

調査結果をまとめると、講義に関しては約9割の学生がポジティブな解答をしている。その主な

理由として、受講科目の知識が深まるなどの解答を出している。逆に約1割の学生が、講義に対して否定的な解答を出している。その主な理由として、教科書と同等な内容を講義で説明されても意味がないという理由が多かった。講義とは反対に、チュートリアルについては、回答者全員ポジティブな解答をしている。その主な理由として、少人数クラスのため、他の学生とのディスカッションがしやすいなどがあげられている。

5. 考察

前項では調査結果を示したが、講義については著者の予想に反して、多くの学生が講義の重要性を認識している結果となった。約1割の学生が講義に対して否定的な解答をしたが、その理由は講義と教科書の内容をそのまま教員が重複して口頭で伝える事をあげている。本稿の調査で協力して頂いた4名の講師によると、オーストラリアの学生達は、基本的に授業前には教科書を読んで、講義に出席するように伝えられていると説明があった。しかし、講義に対して肯定的な見方をしている学生の理由に見られるように、学生自身が教科書を読んで理解できない箇所を教員が予測し、教科書に書かれている内容をより深めさせるような講義を展開する事で、この否定的な意見は肯定的な意見になるのではないだろうか。チュートリアルに関しては、著者の予想通り肯定的な意見が多く、回答者全員がチュートリアルの重要性を認識している。その理由の多くが、少人数による担当チューターや他の学生とのディスカッションや、疑問点の解決や教科書に対する理解が深まるなどをあげている。アンケート調査の結果、オーストラリアやニュージーランドの大学に見られる講義+チュートリアルの組み合わせによる授業は、学生の受講科目に関する理解に大きく貢献している事がわかる。

しかし、実際に講義において授業で習得すべき内容を担当教員が説明し、チュートリアルでその内容を深く掘り下げ、各学生への学習サポートの強化が出来たとしても、チュートリアルクラスに関していくつか問題点は残る。まず、一つ目の問

題は、どれだけチュートリアルクラスを担当できる教員（以下チューターと記す）を確保できるかという問題である。講義とチュートリアルに分けて授業を展開する訳であるから、チュートリアルクラスを担当できるチューターの確保が重要になる。しかしながら、大学の予算は限られている事が多く、常勤のチューターを増やす事は容易ではない。そこで、この問題の解決策として、後期博士課程などの大学院生にチューターをTAとして依頼することも考えられる。実際に、オセアニアの大学では、チュートリアルクラスを担当するチューターは大学院生が多く、学生も教育経験の場を求めている事が多い。チュートリアルクラスで指導経験を積む事で、近い将来、チューターを経験したTAが、大学講師や小中高の教員になった時にその経験を活用し、質の高い教育を将来の学生・生徒に提供できる可能性が生まれ、予算もある程度は削減できるはずである。

二つ目の問題点としては、チュートリアルクラスの日程についてである。オーストラリアの大学ではチュートリアルクラスが、講義の直後に開講される保証はなく、通常は講義とチュートリアルクラスは曜日が異なることが多い。学生は他の科目も複数同時に受講しており、受講科目が多い学生ほど、チュートリアルクラスへの参加が困難になる可能性がある。本稿のアンケート調査において、この問題点を指摘した学生はいなかったが、この問題を解決する為に、Prather et al. (2005)が、報告している授業スタイルが参考になる。Prather et al. (2005)によれば、15分という短いチュートリアルクラスではあるが、講義の直後にチュートリアルクラスを開催することで、学生の授業日程が比較的組みやすくなる。また、大学に環境と機材が整っている事が前提になるが、講義クラスを前もってビデオに録画し、オンラインで学生が時間のある時に個人で学習させ、本来講義に当てられる授業の時間帯をチュートリアルクラスに当ててしまう事も可能であると考えられる。この授業方式は反転授業として実際にこの形式で授業を展開している大学も日本国内にある（木村、山本、祐伯、2014）。反転授業を実際に展開しようとする、大

規模なインフラ整備や教員への負担がかかると反論があるかもしれないが、使える機材を使うことで経済的にも時間的にも大学と教員双方にとって負担にならないように展開できる。例えば、ビデオ講義の撮影機材は、ビデオカメラがあれば一番良いが、現在はデジタルカメラやスマートフォンにも録画機能が充実しており、こうした機材を使う事で経済的な負担はあまりかからないと考える。また、木村、山本、祐伯(2014)が説明しているように、ビデオコンテンツに関しても、YouTubeやDailymotionなどの動画サイトを利用する事で、時間と予算を最小限に抑える事が可能である。

三つ目のチュートリアルクラスにおける問題点として、学生がチュートリアルクラスのような少人数のクラスに順応できない可能性がある。特に、日本の学生はこれまで講義スタイルで、知識をインプットする形式の授業に慣れてきているため、チュートリアルのような少人数クラスで学生中心の参加型授業になると、どのように授業に参加してよいのか戸惑うことがある。Robertson et al. (2000)も、オーストラリアの大学に置けるチュートリアルクラスにおいて、この問題点を指摘している。実際にチュートリアルクラスを担当する講師によると、チュートリアルクラスにおいて、留学生は発言機会が少なくなり、ある事柄に対して、個人的な意見をあまり言いたがらない。さらに、担当講師に質問することもあまりしないかわりに、教科書の内容や講師の言ったことをノートに取ることに集中することが多く、学んだことをアウトプットするというよりは、インプット中心の学習になる場合が多い。

はじめにの項でも述べたが、チュートリアルでは講義で学んだ知識をより深め、学生が疑問に思っている点をクリアーにすることが目的であるが、肝心の学生が受け身の姿勢でチュートリアルを受講すると、せつかくの少人数によるチュートリアルの効果をあまり発揮しない。この問題を解決する方法として、Robertson et al. (2000)がいくつか効果的な手段を提供している。

1:チュートリアル担当講師は、各チュートリアルクラスが、たとえ少人数クラスであったとしても、クラス全体によるディスカッションのようなアクティビティーを避けて、できるだけペアーや3~4人のグループアクティビティーを取り入れる。

2:留学生と地元のオーストラリア人をグループ内に混ぜて、ディスカッションさせる。

3:担当講師が、特に留学生には簡単な質問をして、できるだけ留学生をディスカッションに取り入れる。

4:特に留学生には、より多くの時間を与え、考える時間を与えるようにし、よりわかりやすく説明する。

2番目と3番目の項目は、留学生が対象となっているが、これは留学生に限らず日本人だけのクラスであっても参考利用できる項目である。例えば、2番目の項目に関しては、チュートリアルのクラス内に積極的な発言をする学生とかなり消極的な学生がいたとする。この両極端な学生をペアーにすれば、積極的な学生が、消極的な学生を誘導してくれる可能性は高い。3番目の項目に関しては、これも留学生に限ったことではなく、日本人だけのクラスに置いても、消極的な学生を見つけたら、講師がその学生に簡単な質問をして、発言機会を与えることもできるし、積極的な学生の近くに消極的な学生を座らせ、積極的な学生にサポートを任せることもできる。

6. まとめ

本稿では、オーストラリアの大学における講義とチュートリアルスタイルの授業形態を調査した。現地の大学生にアンケート調査を行った結果、チュートリアル授業に関してはアンケート対象者全員からポジティブな解答が得られた。その主な理由として、「担当チューターや他の学生達とより多くのコンタクトやディスカッションがある」や「実践的な(授業に関する)アクティビティー」などがあげら

れ、チュートリアル形式のクラスが学生の学習サポートを効果的に機能している事が判明した。また、アンケート調査の結果、講義クラスに関しても9割の学生が肯定的に捉えている事も判明した。講義クラスでその科目に対する知識を深められると捉えている学生が多く、この事は日本の文部科学省が推奨するアクティブ・ラーニングやプロジェクトベース型授業で、ディスカッションやディベートを効果的に行う上で、重要なことであると考えられる。ある程度の必要知識がないと、せっかくディスカッションやディベートする機会が学生に与えられても、これらの活動がうまく出来ないことになりかねない。

しかしながら、チュートリアルクラスを提供する際の問題点も残る。チュートリアルを担当する教員の確保の問題、学生のチュートリアル受講日程の問題、そして日本人学生がオセアニアの大学に見られるチュートリアルクラスのような形のクラスに馴染むかどうかの問題。こうした問題を解決するのは容易ではないが、大学院生をチューターとして利用したり、チュートリアルの時間を短くしたり、反転授業を取り入れたり、そして、チュートリアルスタイルに慣れない学生のために、ペアワークなどを積極的に取り入れる事で解消できるのではないだろうか。

7. 参考文献

Bulter, Jennifer A. (1992), "Use of teaching methods within the lecture format." *Medical Teacher*, March, 14, Issue 1, 11 – 26.

Maheshwari, P (1997), "Improving the learning environment in first-year programming: integrating lecturer, tutorials, and laboratories." *Journal of Computers in Mathematics and Science Teaching*, Vol 16 No 1, 111-131.

Prather, Edward E., Slater, Timothy F., Adams Jeffrey P., Bailey, Janelle, M., Jones, Lauren V., and Dostal, Jack A. (2005). "Research on a Lecturer – Tutorial

Approach to Teaching Introductory Astronomy for Non – Science Majors" *The Astronomy Education Review*, Issue 2, Vol 3, 122 – 136.

木村修平、山本好比古、祐伯敦史 (2014) 「反転授業形式による英文ライティング添削指導のためのオンライン動画教材の政策と活用について」『CIEC 研究報告集』 Vol 5, 80-83

田林葉、西出崇、宮浦崇、重森臣広 (2009) 「英語教育の国際化 – 政策科学部学士課程における実践型英語ライティング」『立命館高等教育研究』 第9号 108 – 124.

Robertson, Margaret, Line, Martin, Jones, Susan, and Thomas Sharon (2000). "International Students, Learning Environments and Perceptions: a case study using the Delphi technique." *Higher Education Research & Development*, 19:1, 89 – 102.

文部科学省 (2012) 大学教育部会 (第11回) の審議のまとめについて (素案)
Retrieved on June 8, 2014 from
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1318247.htm